



総選挙と独立記念日と愛国心

もぎ のりえ
茂木 規江

アダム・ミツキエヴィチ大学・講師

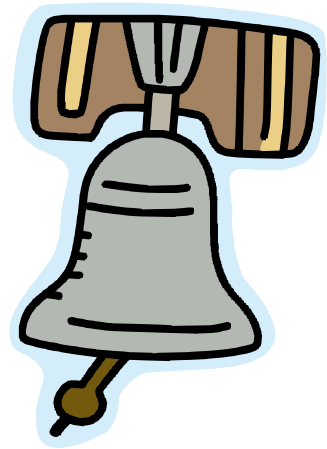
ポーランドで10月21日に行われた総選挙は、投票率40.6%と史上最低だった2年前に比べ大幅に上昇し53.9%と1991年以降最高の投票率となりました。政治不信や人材流失によって民主化以来投票率が低下している中東欧諸国における常識を覆し、有権者の関心の高さが浮き彫りにされました。一般に、農村部では日曜日には教会へ行き、それから投票に行くという習慣があり、教会での投票示唆を指摘する声はあるものの、ほぼ一定の投票率が得られます。その反面、都市部では政治無関心から、投票率の低さが問題とされていました。ところが、今回の選挙では特に若者や大都市において投票率が高く、多数の無党派層の票が動いたことを伺わせました。

選挙前からも関心の高さは見られ、一部の国立大学では実家が遠い学生のために、学長命令で投票日当日及び翌日は休講という特別措置をとっていました。また、2年前とは様子が異なり、選挙前から「投票に行く」との声も多数聞かれました。リップサービスでしかない選挙公約に嫌気のさした有権者が選挙を棄権し、結果として選んだわけではない政治家に振り回されることになった2年間の苛立ちや、後悔の念からだったのでしょうか。

投票日のニュースでは、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどから、在外ポーランド人が投票のために、何時間も長蛇の列に並んで順番を

待つ様子を繰り返し取り上げ、選挙への関心の高さが国内だけにとどまらないことを強調していました。在外ポーランド人は、前連立政権の不安定さが、国内に波紋を起こしただけにとどまらず、強硬な外交姿勢により隣国との溝を深める一方、EU内でも独自路線を貫くことで軋轢を生んできたことを肌で感じ、それに終止符をうちたいとの思いから投票に行ったのでしょうか。強制されることを極度に嫌う自称「個人主義」のポーランド人が、母国の危機を救うべく一致団結したのか、危機感に愛国心が奮い立っての行動だったのかと、考えながらニュースを見ました。

投票結果は、第一党の「法と正義」が大幅に議席を伸ばした「市民プラットフォーム」にその座を奪われ、セクハラ疑惑の渦中の「自衛」も、攻撃的かつ超保守的な「家族同盟」も得票率5%未満で議席獲得ならずと、国民の怒りが反映されたものとなっていました。国内のマスコミは、総選挙の結果が隣国のニュースで大きく取り上げられていたことを伝えることを通して、今回の選挙が今までの外交問題からヨーロッパ諸国でも注目を浴びていたことを、改めて国民に印象付けていました。国民の審判が下ったことを素直に認めたくないのか、カチンスキ大統領は敗因理由に自分の健康状態や、クワシニエフスキー前大統領のアルコール中毒問題が、選挙直前に取りざたされたこ



と等をあげていました。国内外で摩擦を起こしてきたカチンスキ大統領が、EU諸国でも期待を受けているトゥスク総理大臣と今後どのように、連立政権を運営し選挙公約の実現をはたしていくのか、注目されるどころです。選挙後直後に行われた教員の集会もストライキには突入せず、「選挙前の公約を忘れるな」という忠告だけにとどまっていた。

さて、ポーランド人の愛国心を垣間見たような選挙後の11月11日、ポーランドは第89回の独立記念日を迎えました。この日は、123年間の占領期間を経て独立を果たした第一次大戦終結日を記念したのですが、記念日に制定されたのは、第一次大戦終結後20年近くたった1937年です。皮肉なことにその後わずか1年でポーランドはまたも被占領国になり、再び独立国家となるのは第二次大戦後です。しかし、1946年以降は共産主義の影響で、11月11日の「独立記念日」は普通の日とされ、記念日を祝うことも禁止されます。この日が再び「独立記念日」となるのは、体制が変わりポーランド共和国となった1989年からです。したがって、この間に独立記念日の存在を知らない世代が育ってしまったとしても、不思議なことではありません。愛国心に訴え歴史の浅い「独立記念日」の定着を図る目的か、毎年独立記念日には、故意に愛国心を煽るような音楽や言葉が頻繁に聞かれま

す。また国内各地で独立記念式典が催され、その様子はテレビやラジオで繰り返し放送され、最近では記念パレードなども行われています。ただしポズナンに住んでいると、記念日の定着努力の成果があまり見えません。

この日ポズナン市でも独立記念式典は行われませんが、11日はキリスト教の「聖マルタンの日」で、聖マルタンを守護聖人とする市にとっては特別な日に当たります。ポズナン市民が11月11日は何の日かと問われれば、「独立記念日」と答える人より「聖マルタンの日」と答える人の方が多いのではないのでしょうか。どうも地元愛が愛国心に勝っているようですが、これは歴史的なことに起因しています。長い間祝うことを禁止された独立記念日とは異なり、キリスト教の伝統である聖マルタンの日は禁止されることもなく、地元市民の手で祝い続けられてきたものなので、身近でより重要な日と感じられるようです。ポズナン市民の手で受け継がれてきた「マルタン」ケーキ（三日月型で白いケシの実がたっぷりに入ったもの）が売り出され、ケーキ屋の前にはこれを買求める人たちが長い行列ができるのも、この日の特長です。市内はケーキを頬張りながら、聖マルタンに扮した一行の行進や、歌や踊りなどの催し物を見物する人達で夜までお祭り騒ぎが繰り広げられます。